[別紙2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 入 山 茂 美

本研究は、思春期の若者への包括的な性教育に資するために、社会生態学的視点の概念枠組みの中で、母親と父親のモニタリングが高校生の性交渉経験と関係があるかどうかを日本の東北地方のある県の高校1年生218人を対象に検証したものである。その結果、以下のような知見を得ている。

1. 多変量ロジスティック回帰分析の結果、母親のモニタリングを高く認識していた女子生徒は、低く認識していた女子生徒よりも性交渉経験のない傾向が有意であった。

2. 粗オッズ比、男女別の分析、多変量ロジスティック回帰分析の結果において、父親のモニタリングと男女生徒の性交渉経験の有無とに有意な関連はみられなかった。男女別の分析結果の粗オッズ比には違いがあり、また男子生徒における粗オッズ比の 95%信頼区間は広い範囲をとった。対象数が少ないため、父親のモニタリングの影響についての結論を得ることはできなかった。

3. 粗オッズ比と多変量ロジスティック回帰分析の結果では、娘の生理に対する母親のモニタリングと女子生徒の性交渉経験の有無とに有意な関連はみられなかった。

4. 多変量ロジスティック回帰分析の結果から、母親と性に関する会話を多くしている生徒は、会話の少ない生徒よりも性交渉経験のある傾向が有意であった。

5. 粗オッズ比、男女別の分析、多変量ロジスティック回帰分析の結果において、仲間内の性行動に関する規範が高い男女生徒は、低い男女生徒よりも性交渉経験のない傾向が有意であった。

6. 母親のモニタリングの値は、男子生徒よりも女子生徒の方が有意に高かったが、父親のモニタリングの値では、男女差はなかった。また、男女生徒あわせた分析では、母親のモニタリングと父親のモニタリングは正の相関があったが、母親のモニタリングの値は父親のそれよりも有意に高い値を示した。

以上、本論文は、母親と父親のモニタリングを明確に分けて測定したことにより、社会生態学的な視点の概念枠組みの中で、母親のモニタリングと仲間内の性行動の規範が、思春期の女子の性交渉開始時期を遅らせる防御要因になりうることを明らかにした。本研究は、これまで明らかにされてなかった母親と父親どちらのモニタリングが、思春期の若者の性行動に影響するのかを検討した点で独創性をもち、日本の若者への包括的な性教育のあり方を考える上で重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値すると考えられる。